

特集「言語文化教育のポリティクス」

【委員企画フォーラム】

## 委員企画フォーラム「経験から編み直す

### 言語文化教育ポリティクス——M-GTA を例として」の趣旨

近年、言語文化教育の分野においても、質的データ分析法が注目されるようになり、エスノグラフィーやライフストーリー、M-GTAやSCATなどを用いて、言語学習者や教師の語りを検討する試みがなされるようになった。質的データ分析法においては、個人の経験に注目し、ある事象の個人にとっての意味を明らかにすることによって、隠れた権力関係や、構造における問題点を発見し、検討することが可能になるとされている。研究者が実践者でもあることの多い言語文化教育では、研究の着想を教師や実践者としての経験から得ることも多く、現場における問題の解消やよりよい理解を目指して、質的研究が実施されていることも多いようである。一方で、質的データ分析法をめぐることは、分析の方法論にのみ関心が寄せられ、研究者として生成する知識と実践者としての実践の関係など、言語教育分野における目的論については、議論が遅れている状況にある。そこで、本フォーラムでは、方法論だけではなく、質的データ分析法について理論的な理解を深めることを目的として、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を取り上げる。具体的には、日本語教育分野でM-GTAを使って実施された研究事例をもとに、登壇者に研究の背景について話題提供をしていただく。そのうえで、M-GTAの開発者である木下康仁氏（立教大学）に「なぜM-GTAを考案する必要があったのか」という根本についてお話しいただく。本企画を通じて、言語文化教育に携わる研究者が自身の実践フィールドで研究活動を行う意味について、参加者それぞれの理解が深まることを期待したい。

牛窪 隆太（関西学院大学・企画者）